

子ども版災害後ストレス反応尺度 (PTSSC15) の作成と妥当性
- 児童養護施設入所児童といじめ被害生徒を対象に -

富永良喜・高橋哲・吉田隆三・住本克彦・加治川伸夫
(兵庫教育大学発達心理臨床研究センター紀要掲載予定)

PTSS10 (Post Traumatic Symptoms Scale ; Weisearth,1989) は、災害後の特徴的な心身反応10項目から構成されており、阪神淡路大震災後に、PTSD (Post traumatic stress disorder) のスクリーニングテストとして用いられた。そこで、項目を子どもがわかる用語に改変し、あらたに5項目を追加し、2件法から6件法に改めた子ども版災害後ストレス反応尺度 (PTSSC15) を作成した。調査では、小学校4年生から中学校3年生、352名の児童養護施設入所児童と412名の家庭児童を対象とした。あわせて、一般性ストレス反応調査 (嶋田・戸ヶ崎・坂野 1994) を実施した。因子分析をおこなった結果、10項目では、1因子のみが抽出された。また、15項目では、2因子が抽出され、PTSD因子とうつ因子と命名した。児童養護施設入所児童は、家庭児童に比べ、PTSSC15 得点は有意に高かったが、児童養護施設入所児童の被虐待経験の有無には有意な差が認められなかった。調査では、中学校2年生342名を対象に、いじめ被害といじめ加害調査票をあわせて実施し、PTSSC15 の妥当性を検討した。いじめ被害群は、いじめ被害なし群に比べて、有意に高い得点を示し、PTSSC15 が被害にあった時の心身反応を測定する尺度として妥当性があることが示された。

Keywords : PTSD、心理テスト、児童虐待、いじめ

海外では、自然災害や児童虐待・いじめなどによる子どもの心の傷やトラウマを把握するための試みが多くなされている (西澤, 2000)。わが国においては、阪神淡路大震災を契機に、20項目からなる CPTS-RI (Frederick, C., Pynoos, R., & Nader, K. 1992) が、小西・田中 (1995) によって翻訳された (Greca, A.M., Verberg, E.M., Silverman, W.K., Vogel, A.L. & Prinstein, M.J. 1992)。CPTS-RI は、DSM- の PTSD 症状である侵入、回避、過覚醒の3つのカテゴリーを基準に構成されており、単回性トラウマを評価するのに最も有効だと考えられている。また、服部・山田 (1999) は、CPTS-RI を参考にした24項目の「自分を知らうチェックリスト」を作成し、被災地の子どもの大規模調査を行っている。各項目にイラストを入れ、「ある・あるある・あるあるある」と直感的に回答しやすいように工夫されている。

一方、成人を対象とした災害後のストレス反応を測定する尺度は、過覚醒・侵入・回避の22項目からなるIES-R (Weiss, 1997) 災害後の心

身反応の特徴を10項目にまとめたPTSS10 (Post Traumatic Stress Symptom 10 ; Weisaeth, 1989) が代表的である。PTSS10 は、項目数が少ないため阪神淡路大震災後のスクリーニングテストとして用いられた (Kato et al., 1996)。

自然災害や事故などが単発的な出来事であるのに対して、児童虐待は繰り返し行われることが多い。そのため、「地震の..」といった特定の出来事を尋ねる質問形式をとることができない。児童虐待などの人的災害の及ぼす子どもの心身反応を捉える代表的な尺度として、TSCC (Trauma Symptom Checklist for Children ; Briere, 1996) がある。TSCC は、不安、抑うつ、怒り、心的外傷後ストレス、解離、性への関心の6つの臨床尺度から構成されている。西澤 (1999) は、TSCC を翻訳し、児童養護施設入所児童を対象に性尺度を除いて調査を行っている。

災害や事件後の心のケアとして、児童の心の状態をアセスメントすることは、なによりも大切である。しかし、ストレス反応調査票に、「事件のこ

とが..」といった用語が含まれていたり、項目に「自殺したい」などがあると、教育現場は、抵抗を示す傾向にある。嶋田・戸ヶ崎・坂野(1994)は、GHQなどに、重たいうつ反応が含まれているため、教育現場は、それらの尺度を活用しにくいことを指摘している。

そこで、教育現場も受け入れやすく、災害後の心の状態を、少ない項目で、ある程度把握できる尺度の開発が望まれる。このような一次的なスクリーニングテストによって、個別的な要配慮児童を把握できれば、TSCCやCPTS-RIなどを面接相談と併せて活用し、さらに心のケアをすすめることができる。それ故、嶋田・戸ヶ崎・坂野(1994)の児童用ストレス反応尺度と、TSCCの中間に位置する尺度を構成したい。

本研究では、虐待やいじめや事件などが心身に及ぼす影響を測定する簡便な尺度を作成することを目的とする。

調査 児童虐待とPTSSC15

目的

心的外傷を体験した児童をスクリーニングできる簡便なストレス反応尺度を開発することを目的とする。ストレス反応尺度の作成にあたっては、PTSS10を基準に、10項目の他に、災害後の心身反応として重要と考えられる5項目を追加する。虐待を経験してきた児童と一般家庭児童との得点を比較し、その妥当性を検討する。

方法

1)対象

対象児は、小学校4年から中学校3年まで、計764名である。児童養護施設入所児童(以下、養護児童)は、352名、家庭児童は、412名である。家庭児童の地域は、ニュータウンと旧来の市街地を含む地方の小都市である。児童養護施設は、兵庫県児童養護14施設である。

養護児童の虐待を受けた経験については、児童養護施設職員からのアンケートに回答してもらった。身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待、性的虐待のそれぞれについて、

- 1.なかった
- 2.あったらしい
- 3.一時的にあった
- 4.かなりあった
- 5.わからない

のいずれかに回答してもらった。4つの虐待のうちいずれか1項目でも「かなりあった」と回答

Table 1 対象児童の学年・性別ごとの人数

	学年	男	女	合計
養護児童	小4	30	30	60
	小5	28	30	58
	小6	30	23	53
	中1	33	34	67
	中2	28	27	55
	中3	38	21	59
	合計	187	165	352
家庭児童	小4	47	30	77
	小5	41	33	74
	小6	38	26	64
	中1	31	35	66
	中2	34	28	62
	中3	34	35	69
	合計	225	187	412

された児童を「あった」群とした。「あった」群を除いて、いずれか1項目でも「一時的にあった」と回答された児童を「一時的あった」群とした。「あった」群と「一時的あった」群を除いて、いずれか1項目でも「あったらしい」に回答された児童を「あったらしい」群とした。「あった」、「一時的あった」、「あったらしい」群を除いて、「わからない」に回答された児童を「わからない」群とした。4つの虐待の全てに「なかった」と回答された児童を「なかった」群とした。

2)調査項目の選択

PTSS10の飛鳥井・三宅(1998)の訳は以下の通りであった。

Table 2 PTSS10の飛鳥井・三宅(1998)の訳語

- 1.寝つけなかった。途中で目が覚めた。
- 2.そのことに関する嫌な夢を繰り返した。
- 3.気分が沈みがちだった。
- 4.ささいな音や動きや揺れに過敏に反応しやすかった。
- 5.人と話をする気になれなかった。
- 6.イライラしやすかった。
- 7.気分が動揺しやすかった。
- 8.そのことを思い出させるような場所や人、事柄を避けていた。
- 9.体が緊張しやすかった。
- 10.自分を責めてばかりいた。

高橋哲と富永により、小学校3年生以上が理解できる用語に変え、小学生2年生、10名に聞き取り調査を行った。その結果、「気持ちが動揺しやすい」が「わからない」と回答したものがいたため、(落ち着かない)と補足した。

また、10項目には含まれていないが、災害後の心身反応の

特徴として重要と思われる5項目(再体験(フラッシュバック)、食欲不振、身体反応、不集中、不安)を追加し、Table 3の15項目を作成し、PTSSC15(Post Traumatic Stress Symptoms for Children 15items)と名付けた。

Table 3 PTSSC15の15項目

- 1.ねむれない(寝つきがわるい・夜中に目がさめる)
- 2.いやな夢やこわい夢をみる
- 3.気分がしずむ
- 4.小さな音でもびくっとする
- 5.人と話す気にならない
- 6.いらいらしやすい
- 7.気持ちが動揺しやすい(落ち着かない)
- 8.いやなことを思い出させる場所や、人や物事をさける
- 9.身体が緊張しやすい
- 10.自分を責める(自分のせいで悪いことが起こったと思う)
- 11.思い出したくないのに、いやなことを思い出す
- 12.食欲がない
- 13.ものごと(勉強など)に集中できない
- 14.頭やお腹が痛い
- 15.なにか不安だ

評定は、6件法とし、服部・山田(1999)を参考に、はい・はい・はい・いいえ・いいえ・いいえとした。分析にあたっては、「はい」を5点、「はい」を4点、「はい」を3点、「いいえ」を2点、「いいえ」を1点、「いいえ」を0点と数値化した。

3)調査実施の手順

家庭児童については、クラス担任が、道徳の授業に、各生徒に「心と身体の健康調査票(嶋田ら(1994)のストレス反応尺度、PTSSC15、子ども版ストレスコーピング尺度、自尊感情尺度、自己効力感尺度、社会性尺度)」を配布し、1項目ずつ読み上げ実施した。養護児童については、各養護施設の職員が、同調査票を配布し、小学生ないし中学生のグループ単位で実施した。

結果

1)10項目の因子分析結果

項目1から項目10の10項目の因子分析を行った結果をTable 4に示す。主成分分析を行った結果、1つの因子のみが抽出された。各項目とも因子負荷量が.450以上と高かった。信頼性については、クロンバックの係数は0.778であった。

Table 4 10項目の因子分析結果

項目	($=0.778$)
T1ねむれない	0.491
T2いやな夢	0.542
T3気分がしずむ	0.649
T4小さな音びくっと	0.588
T5人と話す気にならな	0.516
T6いらいらしやすい	0.645
T7気持ちが動揺しやすい	0.711
T8いやなことを思い出	0.557
T9身体が緊張	0.551
T10自分を責める	0.544
固有値	3.40
分散の%	34.0%

2)15項目の因子分析結果

15項目の因子分析を行った結果、2因子が抽出された。第1因子は、再体験(項目11)、自責(項目10)、感情動揺(項目7)、緊張(項目9)、不安(項目15)、不機嫌(項目6)、回避(項目8)、過敏(項目4)の8項目であり、PTSDの代表的な症状によって構成されているためPTSD因子と命名した。第2因子は、食欲不振(項目12)、引きこもり(項目5)、不眠(項目1)、身体反応(項目14)、不集中(項目13)であり、うつ状態の症状であるため、うつ因子と命名した。

Table 5 PTSSC15の因子分析結果

項目	PTSD	うつ
	($=0.798$)	($=0.630$)
T11いやなことを思い	0.704	0.168
T10自分を責める	0.634	0.039
T7気持ちが動揺しやすい	0.624	0.312
T9身体が緊張	0.614	0.073
T15なにか不安	0.589	0.396
T6いらいらしやすい	0.562	0.314
T8いやなことの場所人	0.560	0.171
T4小さな音びくっと	0.540	0.180
T12食欲がない	-0.045	0.740
T5人と話す気にならな	0.126	0.631
T1ねむれない	0.164	0.552
T14頭やお腹が痛い	0.290	0.551
T13集中できない	0.274	0.506
T3気分がしずむ	0.421	0.488
T2いやな夢	0.354	0.378
固有値	4.84	1.23
分散の%	32.29	8.24
累積	32.29	40.53

3) 養護児童と家庭児童の PTSSC15

家庭児童と養護児童の4群を群、15項目の合計得点 (PTSSC15) と、10項目の合計得点 (PTSSC10) をデータとして、それぞれ1要因分散分析を行った。その結果、いずれも群間に有意な差が見られた。多重比較の結果、PTSSC10 では、家庭児童と養護児童の「虐待なし」群と「あったらしい」群の間に有意な差が見いだされた。PTSSC15 では、家庭児童と養護児童の「虐待なし」「あったらしい」「あった」群の間に有意な差が見いだされた。

次に、PTSD因子の8項目の合計得点とうつ因子の5項目の合計得点をデータとして、それぞれ1要因分散分析を行った結果、PTSD因子には、有意な差を見いださなかったが、うつ因子は、有意な差が見いだされた。多重比較の結果、家庭児童と養護児童のいずれの群とも有意な差が見いだされた。

Table 6 PTSSC15 尺度からみた養護児童と家庭児童の比較

尺度	対象群	人数	Mean	SD	F 値 (p 値)	多重比較	
PTSSC10	家庭児童	412	19.9	9.7	3.81 (.002)	[]	
	養護児童	虐待なし	80	23.4			9.2
		わからない	43	22.6			8.6
		あったらしい	70	23.6			10.2
		一時的あった	59	21.0			9.6
		あった	98	22.8			9.8
PTSSC15	家庭児童	412	29.1	14.0	5.85 (.000)	[]	
	養護児童	虐待なし	80	34.6			13.0
		わからない	43	34.0			13.1
		あったらしい	70	35.9			14.9
		一時的あった	59	32.5			14.8
		あった	98	34.6			14.3
PTSSC10	家庭児童	412	18.8	8.9	1.05 (.388)	[]	
	養護児童	虐待なし	80	20.0			8.0
		わからない	43	19.3			8.2
		あったらしい	70	20.5			9.0
		一時的あった	59	18.8			9.8
		あった	98	20.5			8.9
PTSSC15	家庭児童	412	7.1	4.7	19.49 (.000)	[]	
	養護児童	虐待なし	80	10.6			4.7
		わからない	43	10.5			5.6
		あったらしい	70	11.3			5.5
		一時的あった	59	10.3			5.4
		あった	98	10.4			5.2

4) 学年ごとの PTSSC15

Table 7 学年ごとのPTSSC15の平均値

群	学年	平均 SD	PTSSC 10	PTSSC 15		
家庭児童	小4	Mean	20.5	29.8	18.8	7.1
		SD	10.1	14.5	9.0	5.3
	小5	Mean	19.3	26.6	18.0	6.0
		SD	8.7	12.4	8.0	4.5
	小6	Mean	18.2	26.1	16.6	6.6
		SD	10.5	14.8	10.1	4.4
	中1	Mean	21.5	32.2	20.5	8.3
		SD	10.6	15.3	9.2	4.9
	中2	Mean	17.9	26.9	18.0	6.2
		SD	8.8	12.9	8.6	3.8
中3	Mean	22.0	32.9	20.6	8.6	
	SD	8.8	12.7	8.3	4.5	
合計	Mean	19.9	29.1	18.8	7.1	
	SD	9.7	14.0	8.9	4.7	
養護児童	小4	Mean	24.1	36.1	20.7	11.0
		SD	9.7	13.8	8.5	4.6
	小5	Mean	25.6	37.7	21.1	12.3
		SD	9.7	14.5	8.5	5.5
	小6	Mean	19.9	30.1	17.4	9.5
		SD	9.4	14.3	9.1	4.8
	中1	Mean	21.5	32.4	18.8	9.8
		SD	9.5	14.3	8.7	5.8
	中2	Mean	23.9	36.6	21.6	11.1
		SD	9.0	13.7	8.3	5.5
中3	Mean	21.3	33.4	19.8	10.0	
	SD	9.8	13.0	9.3	4.5	
合計	Mean	22.7	34.4	19.9	10.6	
	SD	9.7	14.1	8.8	5.2	

5) ストレス反応尺度(嶋田・戸ヶ崎・坂野,1994) と PTSSC10・PTSSC15 との相関

Table 8 PTSSC15 と嶋田ら (1994) の相関係数 n=412

家庭児童	PTSSC10	PTSSC15	嶋田ら (1994)
PTSSC10	-	0.963	0.657
PTSSC15	0.963	-	0.718
嶋田ら (1994)	0.657	0.718	-

n=352

養護児童	PTSSC10	PTSSC15	嶋田ら (1994)
PTSSC10	-	0.956	0.491
PTSSC15	0.956	-	0.549
嶋田ら (1994)	0.491	0.549	-

嶋田ら (1994) の尺度との相関は、家庭児童を対象にしたときは、0.718 であり、一般性ストレス反応と相関がみられた。

考察

PTSS10 (Weisath,1989) の 10 項目の因子分析結果では、1 因子構造を示した。一方、5 項目を追加した 15 項目の因子分析では、2 因子が抽出された。因子 1 は、災害直後に示す反応から構成されていたのに対し、因子 2 は、「睡眠障害」「食欲不振」「勉強への不集中」「人と話したくない」といった生活にとってもっとも重要な行動から構成されていた。因子 3 は、回避・侵入・過覚醒の 3 大症状から構成されていたため PTSD 因子と命名でき、因子 4 は、抑うつ因子と命名できる。Pynoos(1999)は、「外傷性ストレスによって起きるのは PTSD ばかりか、子どもに関連したものに限ってみても、集中力低下、注意欠損、睡眠障害等々が起こる」と述べている。また、Pynoos は、アルメリア地震の 5 年後に、PTSD と抑うつを合併していた子どもがいたことを報告している。

本研究結果においては、養護児童は、家庭児童に比べて、PTSSC15 の有意に高い得点を示した。それは、特に、PTSS15 の因子 4 (抑うつ)において、顕著であった。すなわち、養護児童は、家庭児童に比べて、抑うつ傾向が、強くみられることが示された。

調査 いじめと PTSSC15

目的

いじめは、児童にとってもっとも身近な危機である。殴る蹴るといった身体的いじめ、物を隠す壊すといった物理的いじめ、無視する・悪口をいうといった心理的いじめがある。そのような行為を継続して行われることは、心身に大きな影響を及ぼすと言われている。そこで、PTSSC15 が、いじめ被害による心身反応をうまく把握することができるかどうかを検討する。そのため、いじめ被害・いじめ加害調査票(富永,1999)をあわせて実施する。

方法

1)対象

中学 2 年生、344 名を対象とした。中学校の地域は、大都市部の周辺都市である。

2)調査材料

PTSSC15 は、調査と同じものである。加えて、いじめ被害・いじめ加害調査票を用いる。

Table 9 いじめ被害・いじめ加害調査票(富永,1999)

友だちから、いやなあだ名でよばれた	友だちから、いやなあだ名でよんだ
「なかまはずれ」にされたり、みんなから無視された	「なかまはずれ」にしたり、無視した
友だちに、しつこく悪口をいわれた	友だちに、しつこく悪口をいった
いやな遊びでからかわれた	いやな遊びでからかった
友だちから、自分の物をかくされたり、こわされた	友だちの物をかくしたり、こわしたりした
友だちから、いやなことをやらされた	友だちにいやなことをやらせた
友だちから、なぐられたり、けられた	友だちをなぐったりけったりした
お金のものをとられた	お金のものをとった
いやなつわさをながされた	いやなつわさをながした
お金のものをおどしとられた	お金のものをおどしとった
けがやあざができるほどなぐられた	けがやあざができるほどなぐった

「この 2 週間でつぎのようなことをされたり、したことがありますか」と設問し、a.なかった b. 1 回あった c. 2 ~ 3 回あった d. 何回もあった の 4 件法で回答を求めた。記名は自由方式とした。

3)実施の手順

クラス担任が、学校生活アンケートと記載された PTSSC15 といじめ被害・加害調査票 (B4 用紙に印刷) を配布し、実施した。所要時間は約 10 分であった。

結果

1)いじめ被害・加害の分析

いじめ被害と加害調査結果から各生徒を次の 4 群に分けた。

いじめ被害・加害のない群：いじめ被害・いじめ加害調査票の全ての項目に、「a.なかった」に をした生徒。

いじめ被害有り・加害無し群：いじめ被害調査票の項目の 1 つ以上に、b. から d. のいずれかに をし、いじめ加害調査票には、すべて「a.なかった」に をした生徒。

いじめ被害無し・加害有り群：いじめ加害調査票の項目の 1 つ以上に、b. から d. のいずれかに をし、いじめ被害調査票には、すべて「a.なかった」に をした生徒。

いじめ被害有り・加害有り群：いじめ被害調査票・加害調査票のいずれも 1 項目以上に、b. から d. のいず

れかに をした生徒。

2)いじめとPTSSC15 との関連の分析

Table10 いじめ加害・被害とPTSSC15 尺度

	群	人数	Mean	SD	F値	多重比較
PTSSC10	被無・加無	129	15.4	9.5	7.51 (.000)	
	被有・加無	60	19.6	8.5		
	被無・加有	45	16.6	8.5		
	被有・加有	94	21.1	10.3		
	合計	326	17.9	9.7		
PTSSC15	被無・加無	129	23.2	14.3	6.80 (.000)	
	被有・加無	58	29.1	11.9		
	被無・加有	44	25.4	12.2		
	被有・加有	95	31.5	14.9		
	合計	326	27.0	14.2		
PTSSC10	被無・加無	129	14.4	9.0	6.30 (.000)	
	被有・加無	59	18.1	7.5		
	被無・加有	44	15.1	7.6		
	被有・加有	96	19.0	8.8		
	合計	328	16.5	8.7		
PTSSC15	被無・加無	132	6.3	4.8	6.15 (.000)	
	被有・加無	59	7.8	4.2		
	被無・加有	48	7.4	4.2		
	被有・加有	103	8.9	5.2		
	合計	342	7.5	4.9		

Table11 PTSS15 の因子分析結果

項目	第1因子 (=.848)	第2因子 (=.816)
P11 いやなことを	0.748	0.209
P10 自分を責める	0.688	0.149
P7 気持が動揺	0.661	0.332
P15 なにか不安	0.644	0.435
P9 身体が緊張	0.626	0.103
P8 いやなこと	0.625	0.253
P6 いろいろ	0.574	0.406
P4 小さな音	0.525	0.323
P12 食欲がない	0.088	0.736
P5 人と話す気に	0.277	0.674
P14 頭やお腹が痛い	0.222	0.660
P1 ねむれない	0.210	0.650
P3 気分がしずむ	0.427	0.634
P13 集中できない	0.232	0.587
P2 いやな夢	0.367	0.572

考察

いじめ被害者は、抑うつや不安が高くなるという報告 (Smith,1991 : Slee,1995) がなされている。本研究結果は、いじめ被害を受けていると自覚している者が、そうでない者よりも、PTSSC15 得点、PTSSC10 得点、因子 得点が有意に高いことを示

した。このことは、いじめ被害が、PTSDにかかわるストレス反応を引き起こすことを示唆している。一方、いじめ加害のみある子どものストレス反応は、いじめ被害・加害のいずれもない子どものストレス反応と、有意な差が認められなかった。このことは、いじめ加害が、PTSDの視点からのストレス反応との関連は認められないことを示している。PTSSC15 には、怒りに関する項目がないために、いじめ加害とストレス反応との関連が認められなかったのかもしれない。

総合考察

災害後の子どもの心のケアにあたっては、まず、心理状態をアセスメントすることが必要である。服部・山田(1999)は、阪神淡路大震災後の子どもの心身反応を、24項目の自験式のチェックリストを用いて明らかにした。そのデータは、子どもの心の回復の貴重な資料となった。しかし、災害は、経済基盤の変化や転居にともなう人間関係のストレスなど2次被害を引き起こす。そのためIES尺度 (Impact of event scale)のようにストレスラーを特定する質問紙を施行することがむづかしい。また、児童虐待のように繰り返し被害体験がある場合も、同様である。

本研究では、PTSDの簡易スクリーニングテストであるPTSS10を子ども用に改変し、さらに、特に重要な5項目を追加したPTSSC15を作成した。児童養護施設入所児童は、PTSSC15得点が家庭児童に比べて有意に高く、特に、抑うつ因子において顕著であった。しかし、虐待経験の有無では有意な差は認められなかった。一方、西澤(1999)は、TSCCによる調査において、児童養護施設入所児童でも被虐待経験のある児童は、心的外傷・抑うつ・怒りなどで、被虐待経験のない児童に比べ、有意に高い得点を示したと報告している。TSCCは、PTSSC15に比べ、より深いトラウマ反応を抽出できるのかもしれない。

災害後の心のケアにあたっては、集団でのスクリーニングテストと個別での心理テストを組み合わせる必要がある。PTSSC15のCutoff値の算出と、

トラウマ反応を的確に抽出できると言われている
T S C C との相関分析が今後の課題であろう。

文献

飛鳥井望・三宅由子 1998 企業職員層における阪
神・淡路大震災復興期のストレス要因 精神医
学,40(8),889-895.

Briere,J.1996 Trauma Symptom Checklist for
Children (TSCC): Professional Manual. Psychological
Assessment Resorce.

Frederick,C.,Pynoos,R., & Nader,K. 1992 Children
PTS Reaction Index(CPTS-RI).

Greca,A.M.,Verberg,E.M.,Silverman,W.K.,Vogel,A.L.
& Prinstein,M.J. 1992 Helping Children Prepare for
Professionals Working with Elementary school
children. funded by BellSouth Foundation.(小西聖子
・田中幸之(編訳) 1995 災害に遭った子どもたち
小学校教師のためのマニュアル 朝日新聞厚生
事業団)

服部祥子・山田富美雄 1999 阪神・淡路大震災と
子どもの心身 名古屋大学出版

Kato,H.,Asukai,N.,Minakawa,K.,& Nishiyama,A. 1996
Post-traumatic symptoms among younger and
elderly evacuees in the early stages following the
1995 Hanshin-Awaji earthquake in Japan. Acta
Psychiatrica Scandinavica,93(6),477-481

木澤弘・勝倉孝治 1996 小学校の学校ストレスが
いじめ同調傾向に及ぼす影響 - 因果モデルの構
成の試み 日本教育心理学会第 38 回総会発表論
文集 504.

西澤哲・中島健一・三浦恭子 1999 養護施設入所
中の子どものトラウマに関する研究 - 虐待
経験と TSCC によるトラウマ反応の測定 日本
社会事業大学社会事業研究所 1998 年度共
同研究報告書

西澤哲 2000 子どものトラウマのアセスメントに
関するレビュー 災害の被災者の精神的回復過
程に寄与する諸要因の研究、91-103、平成 9 ~
11 年度文部科学省科学研究費補助 09480082
代表者 藤森立男

Pynoos,R.1999 子どもと災害 災害とトラウマ
こころのケアセンター編 みすず書房

嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二(1994)小学生用
ストレス反応尺度の開発 健康心理学研究 7
(2)46-58

富永良喜,1999 動作とイメージによるストレスマ
ネジメント教育・展開編 北大路書房

Weisaeth,L.1989 Torture of a Norwegian ship's crew
Acta Psychiatrica Scandinavica,80 63-72

Weiss,D.(1996) Impact of Events Scale- Revised
186-188 Measurement of Stress, Trauma, and
Adaptation Stamm,H.B.

